

令和7年（2025）12月23日 後期全校集会 校長より

みなさん、おはようございます。師走も後半となり、いよいよ今年も余すところわずか数日となりました。これから年末年始を迎えるわけですが、イベントが多く重なり、普段とは違う生活となるため体調を崩しやすくなります。特に3年生は受験を控えた大切な時期です。体調管理にはくれぐれも気を付けてください。

さて、今年のトピックを一つ取り上げますと、日本の二人の研究者がノーベル賞受賞という嬉しいニュースがありました。大阪大学の坂口志文特別荣誉教授が生理学・医学賞を、京都大学の北川進特別教授が化学賞をそれぞれ受賞しました。お二人の研究が今後の持続可能な社会と健康を支える画期的な成果をもたらしたと評価されたわけです。

このお二人が11月に京都大学にて対談を行っていますが、その中で興味深い発言がありました。それは「サイエンスがより豊かになるために、文科系の学問は重要」、「哲学や芸術など、専門分野以外の幅広い学びや関心が独創的な研究を進めるうえで大切だ」というもので、お二人は口をそろえて文理の枠組みを超えることの重要性を述べています。

お二人が学生時代を過ごした時代は大学紛争真っただ中で、授業はあまり行われず、もっぱら下宿で人文社会系の書物を読んでいたのだそうです。そこで得た哲学・文学・芸術の知識が、その後の科学研究に大いに役立ったというわけです。

特に北川さんは学生時代に読んだ中国の思想家である莊子の「無用の用」ということばを常に思い起こして研究に励んだそうです。「無用の用」とは、「一見役に立たないものが、実は大きな価値や意味を持つ」という考え方です。「莊子」の中では、次のような大木のエピソードとして語られます。

ある大きな木がありました。幹が曲がりくねっていて材木として使えません。そこで人々は役に立たないとして切らずに放っておきました。長い年月が経って、その木はさらに大きくなり、旅人に涼しい木陰を提供します。莊子はここで、「役に立たないと思われることが、かえって生き延びる理由になる」と説きます。

科学研究は仮説を何度も立て、失敗を繰り返す過程です。失敗するとつい「意味がなかった」と考え、時間を無駄にしたと思いがちです、しかし北川さんはこの「莊子」の「無用の用」ということばを胸に、どんな基礎研究にも価値があると考え、決して落ち込まずに次へ切り替えたわけです。この信念が、今回のノーベル賞につながったといっても過言ではないでしょう。

考えてみれば文系科目と理系科目どちらにも論理的思考力が大切です。そこにあらゆる分野の知識を総動員すれば、研究にますます深みが出ることでしょう。明治の文豪、森鷗外も本業は医師でした。皆さんもぜひ一つの分野にとらわれることなく、広く興味を持って学んでください。まずは年末年始の休みを利用して、幅広い分野の本を読むことをお勧めします。

最後に、話は変わりますが、先日気になる報告が政府からありました。首都直下型地震の被害想定見直しの報告です。今回の政府が発表した被害想定やハザードマップに目を通し、命を守ることを最優先に行動するよう、日ごろから備えを万全にしておきましょう。

それではみなさん、よいお年を。2026年を元気で迎えましょう。